

◇===== [第 51 号] =====◇

唯契の窓 唯物論的社会契約論研究所月報

2022 年 9 月 1 日

◇=====◇

先月号で、安倍元総理の死を政治利用する動きについて触れましたが、この間の岸田内閣の動きがどうもおかしい。特に統一教会をめぐって岸田内閣の動きは歯切れが悪すぎます。

いま安倍の国葬を強行することで一番の利益を受けるのはだれか。それは深いかかわりを持っていた統一教会かもしれません。とすると岸田内閣と統一教会の関係は？ 疑念が広がるのも無理からぬ事でしょう。

司法の世界では「疑わしきは被告の利益に」という言葉がありますが、政治の世界では違います。「疑わしきは国民の利益に」。そうでなくてはならないはずです。

●===== [時事解説] =====●

安倍晋三元総理の殺害事件を機に、統一教会（現、世界平和統一家庭連合）に関する世間の興味が高まって来ています。

良い機会ですので、唯物論的社会契約論が宗教をどのように捉えているのか、少し紹介させていただきたいと思います。

まず唯物論は神の存在を認めていないのではないかという、よくある誤解についてです。

結論から言うと唯物論は神の存在を認めています。神は人間の精神の外側に、一つの概念として存在しており、人間の精神に対して影響を与える存在です。唯物論は人間の精神は外界の反映であると考えますが、ここでいう外界というものは必ずしも物理的な存在に限られるわけではありません。一人の人間の所属する社会が、長い歴史を通じて作り上げてきた習慣やものの考え方なども、人間の精神に影響を与える外的存在であり、神という概念もこうした人間の営みが作り上げてきたものとして、確かに人間の精神に影響を与えているのであって、それを否定することは科学的な態度であるとは言えないでしょう。

唯物論は世界の成り立ち（世界が成立する一連の経過）において、神の存在を必要とはしません。神は人間の世界が成立する中で作り出されたものであって、世界の成立の原因ではありえないことは科学的な事実です。この立場から宗教を考えるとということが、唯物論的社会契約論における基本的な姿勢となります。

さらに唯物論的社会契約論では、現在の社会を成り立たせているのは社会契約であって、それはどのような職業であれ、社会の必要に応えているからこそ成り立ちうるのだという前提が存在します。ただし資本主義の下にあっては、

その歪んだ経済の仕組みに由来して、本来社会のだれも必要としていないのに寄生的に存在する職業も存在できてしまいます。不労所得を生活の基盤としている「資本家」や投機的「投資家」を筆頭に、地主・軍人などに加え、暴力団などがそれに当たります。とくに資本主義の下でも合法的には存在できない職業集団は反社会的組織と呼ばれています。

では僧侶や聖職者などの宗教家はどうか。つまり宗教は社会契約上正当な存在理由を示せるものであるのかという点については、これは正当な存在だと認めるべきだと思います。人は一人では抱えきれない悩みに直面することがあります。自らも避けがたい死への怖れはもちろんですが、身近な人との死別や病苦、周囲との軋轢など。そうした苦悩に対して神仏の教えを説いて、少しでも心を癒し、生に対して前向きな姿勢を取り戻すことを手助けしてくれる存在。それが社会の求める宗教の役割であると規定できるでしょう。

この二点を基調として宗教についての考察を行います。

さて、宗教の問題を考える上で踏まえておくべき点がいくつかあります。一つは内心の自由を尊重するという事です。人類の社会が健全な進歩を遂げていくうえで、どのようなものの見方や考え方も決して否定されるべきではなく、それを保障することが人類の利益になるという立場から議論がなされるべきであるという事です。

ただし「内心の自由」と言うとき、個人の意思は常に自律したものだと考える事、つまり個人の意思は他者からは完全に自由なものであると考える事は観念論的な誤謬であるという点は指摘しておかねばなりません。これは意識というものは、ある条件の下では他者から容易に操作されうるものであるという、客観的な事実を忘れてはならないという事です。

したがって第二に、同時にそれは他人の内心の自由を制約するような行為を許してはならないという立場ともなります。これはコインの表裏のようなものです。

それゆえ、洗脳や意識統制といった他者の内心を制御するような行為は許されてはならないということでもあります。これはある人が表明する見解に対して、他者が積極的な批判をする場合、批判を受けた人が自らの意思を自らの判断において変える自由を保障するという事でもあるわけです。

信仰に救いを求める人は、そうせざるを得ない苦悩を抱えた人であるという事を前提に、この二つの観点から議論を進める必要があります。信仰は多くの場合、その対象となるもの（神や仏）と、それを中心とした教義、教義を実践する組織という3つの要素を持つ集団（宗教団体）に加わることで実践されます。もしある宗教（あるいは宗教団体）が、苦悩を抱えた信者に対するのは、

少なくともその苦悩に寄り添い、和らげることを目的に行われると考えてよいでしょう。しかしそうした宗教的な外形を取りつつ、信者の苦悩に付け込んで、自己の団体の利益を追求することも可能であるという事実は指摘されなくてはなりません。現象的には信者が自らの救いを求めて集まっているように見える集団も、実は信者を食い物にする団体である場合も想定しうるのです。そうした団体については、宗教団体と言うよりも反社会的集団と見做すことが相応しいと言えます。

このことを説明するのに一つの法律を紹介しておきましょう。

児童福祉法

第三十四条 何人も、次に掲げる行為をしてはならない。

六 児童に淫行をさせる行為

九 児童の心身に有害な影響を与える行為をさせる目的をもつて、これを自己の支配下に置く行為

これが何かといいますと、成人が同意の上であっても児童（１８歳未満の者）と性交することを刑罰の対象として禁止する根拠法です。これは児童が未だ精神的に成長途上にあり、「性的自由権」を行使するには十分な判断能力を有さないという事を前提としています。

思春期の性に対する興味や、恋愛感情と性行為を同一視するような未熟な精神状態につけ入って、あたかも児童の自発的な意思決定にもとづく同意の上での性交渉だとする外形を取ったとしても、それは正当な行為としては認められないという事です。

同じことが、宗教者にも当てはまります。自らの苦悩故に正常な判断能力を欠いた状態にある人々を、騙している可能性があるという事です。

では、ある信仰によって結びついている団体を「宗教団体」と見做すか、「反社会的団体」と見做すかというのは何によって判断されるのでしょうか。

一つにはよく言われるように、教義などの内面の問題ではなく、その団体がどのような活動をしているのかという外形の問題によって判断するという基準があります。

今回の統一教会の事例では、信徒の悩みに付け入って、精神的誘導によって高額な物品の購入や寄付をおこなわせ、それを教団の本部に送金しているという実態が報道されています。この点から言えば明らかに集団的詐欺行為が行われていると認定されるべきで、反社会的団体であるという事は疑いないところでしょう。

二つ目は社会契約論からの視点で、教団の活動が誰の利益になっているのか

という点です。信者がそれによって客観的に救われているのであれば、その教団の活動は社会契約に即したものと見做してよいでしょう。

統一教会の場合、信者は全く救われておらず、教団幹部の利益のみが追求されていると断じざるを得ません。ここで問題なのは信者が主観的に「救われている」と言ったとしても、それは精神操作の結果である可能性が濃いという事です。爆笑問題の太田光氏のコメントが問題視されるのは、「個人の意思は常に主体的に行われるものだ」という太田氏の思い込みに起因していると言えます。

以上、唯物論的社会契約論から統一教会の問題にコメントしてみました。

ところでここからは余談になりますが、統一教会とはそもそもどんな組織だったのかという点について私見を述べておきたいと思います。

そもそも文鮮明が統一教会を起こした際の中心的な教義は、キリスト教の聖書にある「原罪」の独自解釈、つまりイブが蛇（サタン）と不倫したことで人類の血が汚染されたため、救世主の再臨である文が自らの血統を次の世代に残すことで人類の血を清浄化するという事にありました。つまりは文がひたすら多数の女性と性交をすることで汚染されていない血統を持つ人類を作り上げるということです。文はそれを実践したようで、1946 年北朝鮮平壤で混淫による社会秩序混乱の容疑で 3 ヶ月拘留された、1948 年には信者の人妻との強制結婚現行犯で懲役 5 年の実刑判決を受けた、1955 年女性信者を監禁、貞操を奪った梨花女子大事件で逮捕された、などの犯罪歴が残されています。

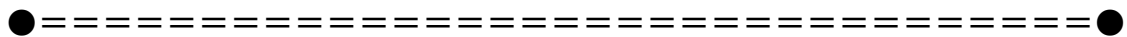
(参照 <https://kyurios.exblog.jp/20431136/>)。

この発想は流石に生物学的に無理があることを自覚したのか、それは集団結婚式という儀式によって代用されることとなりました。

このようにもともと文の淫行目的の似非宗教団体だったものが、東西冷戦の中で「反共」の一点で利用価値が認められ、韓国独裁政権下で成長していきます。文の興味はやがて宗教による支配に傾いていったと思われます。要するに彼が夢見たのはミニチュアサイズの中世カトリック世界のローマ教皇になる事だったというのが私個人の見立てです。

朝鮮半島での反日感情や東西冷戦の反共思想などを巧みに利用しながら、マインドコントロールをフル活用して、今日韓国では財閥と見做されるほどの蓄財を成し遂げたわけです。文の死後は 3 番目の妻が教団を経済団体にシフトするなど、本国では宗教団体というより経済団体と見做されているとのことです (Wikipedia 世界平和統一家庭連合の項参照)、その資金源の多くは日本での「宗教活動」に依存していると報じられています。

なんにしても宗教団体とはかけ離れた存在だといえるでしょう。



☆====[コラム]====☆
アラートです。

いま野鳥の世界では新たな鳥インフルエンザウイルスが猛威を振るっています。2021年に発生したH5N1の変異株が、強力な感染力を獲得し、多くの野鳥を殺しているのです¹。こうした変異はこれまでになかったことです。

気がかりなのはこれが人に感染するウイルスでもある事。いま夏の繁殖地でどのような遺伝子の再集合が生じているのか、冬の訪れとともにそれぞれの国に帰っていく鳥たちが、帰りついた先の環境によってどのような遺伝子再集合の機会を作っていくのか、注意していく必要があると思います。

専門家の見解では、いまだヒトへの感染の脅威は高くないとのことですが、監視と警戒を怠るわけにはいかないと思います。併せて高病原性の鳥インフルエンザの発生に対応できる社会のシステムや医療供給体制の構築も今から準備しておくべきでしょう。C o V I D-19の教訓を生かさなくてはなりません。

☆====☆

【活動報告】 三田市民病院統合移転反対署名のとりまとめ員になりました。

次回の発行は10月1日を予定しております。

¹ ナショナルジオグラフィックス

<https://news.yahoo.co.jp/articles/df410066f90ced3b10ace121be63f25f47371843?page=1>